

合徴の会アンソロジー (Vol.1)

草の花

荒木絹江

呼込みの声単調となる寒さ
よごれなき蒼に対峙す大冬木
蜷の道伸ぶる気配のなき日差し
花人の歩で大川を遡る

- 1 -

夜といふ光桜に加はりぬ
万緑の底に薨も街川も
白壁を曲がり涼風新たなり
つながれし小舟残暑を照り返す
思ひ出の為の日焼かも知れず
草の花打ち寄す波の音の中

- 2 -

鷹止めて

石井宏幸

船形のだんじりひそと三日風
鉄柵をひた啣む馬や花ぐもり
薔薇園の百花に棘を見てをらず
常盤木の騒ぐ空より落葉かな

- 3 -

あめんぼをはじき日輪映りけり
黒潮丸てふ野ざらしのヨットかな
鈴生りの小鯨の竿となりにけり
白砂や波のさらへる花火跡
曼珠沙華日当りながらゐて寂し
鷹止めて枝は安きを寄せつけず

- 4 -

なぜか寂しき

岩崎ゆきひろ

人去れば余寒の募る遺髪塚
大寒を言葉少なに歩みけり
橋脚の島の小さな冬菜畑
み吉野の谷間の宿の冬灯

- 5 -

著ぶくれて顔いつぱいの笑顔かな
誰彼に身を寄せ歩く寒さかな
やうやくの作り笑ひや春の風邪
飯蛸の墨吐きながら買はれけり
空蝉の昇りきりたる高さかな
鶉の声水面えぐりてをりにけり

- 6 -

裸木

植田桂之

裸木には裸木の気あり冬芽たつ
尾根の木々たて髪のごと山眠る
流氷の沖より迫る白さかな
暮れてなほ北の大地の雪明かり

新緑の中に新緑樟大樹

麦秋や日はおもむろに西の空
風はらみ光をはらむ薄かな
捕虫網届かぬ先の蟬の声
寝苦しき夜へと続く暑さかな
秋空を窓の広さに切り取りぬ

天上の花

奥山登志行

寝ころべば天上の花いつまでも
新緑の波打つ街の底を往く
寸鉄となり吾を打てる櫂落葉
薔薇を剪る惜しむ心に待つ心

乾びても鳴くや蚯蚓は石の上
風鈴の星玲瓏と鳴りにけり
一天を指しては引く手盆踊
倒れてもなほ炎たつ鶏頭花
秋水の落ち盤石の屹立に
地に還る色宙に描きもみづれる

数字降る

北村文男

青麦の野を銀の風走る
水を買ふ水の惑星夏燕
空へぽんと筒を鳴らして卒業す
カヌーこぐマングローブの風光る

人妻に無くて七癖七変化
月おぼろ鍵は牛乳箱の中
こはごはと机に開く落し文
パソコンのマウス枕の子猫かな
数字降る夜業の人のハンバーガー

故郷

小六誠一郎

楯に火を点け離農する決意かな
小春日の葬の家まで小半時
向日葵やすつくと立ちて迷はざる
巨大なるオリオン墮つる霜の朝

- 13 -

雛の客わが子の遠くなり
にけり
わらび餅あの頃はみな丸坊主
故郷へ続く鉄路や水草生ふ
夏雲や父の齡を越えにけり
葉桜や戦艦大和帰らざる
ためらうて有明の月沈まざる

- 14 -

名園

桜本滋子

臘梅の香に香をつなぎ園巡る
名園にまぎれ込んだる恋の猫
蜷の道迷ひ込んだる園真昼
めくるめく落花の園の風の中

薔薇の園櫂の森といふ静寂
園の日に錐揉みしつつ竹落葉
旅人に出会ふ蓮見の後楽園
名園に家族の揃ふ良夜かな
芝枯れて静かな園となりけり
花ハツ手園に死角といふ所

桜花

角南房子

咲きそめて花に心もそぞろなる
桜花口にせぬ日はなかりけり
パンジーの黄に午後の日を集まれり
散り敷きて明日の沙羅の荅かな

夏菊の茎に意気込みありにけり
散るも萩吹かるるも萩城の跡
花蓼の燃ゆる野の道風の道
花野今夕日となりて輝けり
歓声を聞くこともなく冬桜
束ねたる水仙の香のふくいくと

春夕焼

田辺文枝

もくもくと花に膨らむ山となる
雨蛙一匹にしてよく響き
山並みをいくつ呑み来し夕立雲
ブラウスの背の色褪せて夏の過ぐ

母に似し人と乗り合ふ盆の汽車
心地よく野辺に吹かれて秋の草
星高く強くまたたく夜寒かな
立冬の少し重たき上着かな
寒風になじみて街を闊歩する
春夕焼街の灯りとなりゆけり

風

辻田百代

春の風邪いうていつもの調子かな
すきな句を書き出しもして立子の忌
葱坊主育つ大きな空のあり
風薫る駅はすぐそこ歩かうよ

- 21 -

大夏木空より風を呼びにけり
新涼の風に咲くもの心まち
貸屋札まだぶら下がり菫の花
鶏頭のだんだん軽くなる色に
一斉に音となりたる稻雀
これも又性分ですと爽やかに

- 22 -

浮いて来い

名木田純子

茎立や大地これより落ち着かず
引き舟の春潮引きて行きにけり
ブリリアントカットの太陽若楓
足先はすでに日向の三尺寝

- 23 -

浮いて来るだけの定めに沈められ
今朝の秋太陽机辺にまでとどく
秋の日のグラスに落ちてワイン色
空の青海の碧の間鷹渡る
北風強し強ければなほ向かひ行く
生涯に一枚彼に毛糸編む

- 24 -

花

伴 明子

二等身二等身なるクロッカス
落ちてより太陽に向く椿かな
茎ぐつと伸びて野蒜の花となる
太陽の心捉へし黄水仙

満開の黄色でありし花ミモザ
忙しく人通り過ぎ立葵
山百合に一人の旅荷降ろしけり
百日紅空花柄にしてをりぬ
探す蔭なくなりカンナ咲く径に
撫子の風を見てみる日暮かな

秋の蝶

三木瑞恵

堂縁は風の道なり蝉しぐれ
何ごとよ潮入川の蟹集ふ
頂の風の隙間をきりぎりす
潮の香の磴登りくる残暑かな

借景の山より下りし秋の蝶
手花火を湿らせてゐる浜の風
乾杯のビールひと口島泊り
波音の突如と高く朝の虫
また鯔の跳ねて秋潮凹みたる
葉月潮かきまはしつつフェリー出づ

ゆびぬき

米元ひとみ

裁ち台に立春の風通しけり
薄氷や浅黄の糸を買ひ足しに
ゆびぬきと親しき暮らし燕来る
採寸の目の端に来て春の鳥

- 29 -

ざくざくと浴衣地で裁つドレスかな
紬縫ふあさがほよりも早く起き
長き夜やへの字くの字の小町針
すいつちよを濡れ縁へ追ふ鯨尺
裁ち台に冬木の影のゆれやまず
針箱の塵を払ひて年惜しむ

- 30 -

秋 冷

富阪宏己

秋冷の連れくるものを数へをり

固きものへと秋冷の至りけり

秋冷の心に羽織る一書かな

秋冷の右手左手重ねけり

病む鳥の眼に秋冷の怯えあり

秋冷の街を車の過ぐるのみ

病むものに秋冷容赦なかりけり

秋冷を知らせる痛み来りけり

秋冷に磨かれてゆく愛までも

秋冷の星の絆の如くあり

あとがき

平成十年の暮、三人で始めた合歓の会も、すでに九年を経過しました。会員数も、今は二十名近くとなり、振り返ると楽しい思い出がぎっしり詰まっていきます。若々しい感受性を大切にしてい、自分の言葉で俳句を作ることをモットーにして励んだ九年間の蓄積が、現在の合歓の会の俳句として定着してきました。ながいあいだには、体調を崩したり、仕事や家庭の事情で、会を休まざるを得ないこともありますが、ともに俳句を作るものとして信頼関係で結ばれた私たちの心は、いつもの一つです。この結ばれた心は、アンソロジーとして編み、姿あるものとしたく、発行に踏み切りました。自然の四季の変化を、生活の中での哀歓を詠んだ、凡句ばかりではあり

ますが、忌憚のない御感想を頂ければ幸甚で
ございませう。これからも私たちは、野や山に
遊び、旅をたのしみ、和やかに談笑しながら、
ともに俳句をたのしんでまいります。来年も
アンソロジーを出せることを願いながら、背
伸びすることなく、自分らしい俳句を作って
まいります。

このたびの発刊に際しましての、富士印刷
の山本さん、会の編集委員の皆様の御尽力に
感謝しつつ、あとがきと致します。

平成十九年十二月吉日 富阪宏己

平成十九年十二月九日発行

発行責任者 富阪宏己

連絡先 富阪宏己

岡山県都窪郡早島町

早島三九九一―一四四

富阪宏己方